

第4回新生匝瑳戦略会議 会議録

開催日時：平成23年4月14日（木）

午後7時00分～9時20分

開催場所：匝瑳市役所議会棟第2委員会室

出席委員：（学識経験者）鎌田元弘、木村乃、渡辺新

（団体推薦者）安藤建子、宇野充紘、萱森孝雄、越川竹晴、

越川八代枝、鈴木和彦、橋場永尚

（一般公募者）大塚榮一、岡田陽子、永野亮太、林暁男、八木幸市

（15人／名簿順）

欠席委員：なし

市出席者：（事務局/企画課）木内課長、大木副主幹、富井副主査（3人）

1 開 会

2 あいさつ（渡辺委員長）

（省略）

3 議 事

- （1）市民病院の経営健全化に関する「委員長提案書」について
- （2）各地のまちづくりの状況について（報告）
- （3）JT跡地、旧小学校施設等の位置付けについて
- （4）その他

[議長]

まず議題の（1）ですが、後にA委員の重要な報告がありますので、これは簡単にいきます。

A4用紙1枚にまとめてある「国保匠瑳市民病院に対する意見書」ですが、現在これを作成しています。今日、前もって皆さんにお渡しして検討しようかと思っていたのですが、ちょっと忙しかったということもありまして、まだ出来上がっていませんので、近日中に送らせていただきます。最初は委員長の個人名で出そうと思っていたのですが、とにかくできたものを皆さんに送りますので、検討していただいて、もし合意が得られれば戦略会議の名前で提出してもいいかなあと思っています。

なぜこれを考えたかといいますと、理由がいくつかありまして、まず理由の1つ目は、市の方へのサービスです。なるべく1つ形のあるものを出してあげたらいいかなあというのがあります。

2つめは、皆さんご覧になっているかわかりませんが、市のホームページに病院のあり方検討委員会の中間報告だと思いますが、それが載っています。それを見てちょっと愕然としまして、これはたぶん中間報告なので後で報告書が出てくると思いますが、ちょっとこれは一言言わないといかんなど。そういうこともありまして、何らかの検討できるようなものを出していきたいと思えます。それが2つ目ですね。

3つ目は、この前一度やったばかりですぐ報告書を出すというのは無茶なことなのですが、前回の会議で出てきたことをそれなりに出しておくことが非常に重要だとも思えます。それでこれをつくらせていただきました。

かいつまんで中身について言いますと、まず「意見書の趣旨」ですね。それは今言ったようなことを書きます。

2番目は自治体病院を取り巻く環境です。これは市で直接どうのこうのってできません。自治体病院の性格で、政策医療としてやられてきたということです。

それと診療報酬の体系です。ドクターフィーとかホスピタルフィーがどういふふうにつくられているかということです。つまり診療報酬を抑制していくと、どうしても政策医療の方を抑えざるを得なくなってくる構造を持っているということです。

あと具体的に自治体病院で出てくる問題は、医師不足と財政問題、この2つだろうと思いますが、医師不足の内の1つは、勤務医の環境の悪さといいますか、それは昔から言われていることでその問題があります。あとは臨床研修医制度の

問題です。

もう1つは括弧でくくっていますが、医学部の定員を減らしているという現状がありまして、こういうことが医師不足に結びついているということです。財政問題は、財政諮問会議でも出されてきた問題で、きっかけは夕張市かもしれません。こういう背景があるということを指摘したわけです。

次に匝瑳市の市民病院です。前回事務局長に出てきてもらったときにちょっと話しましたが、診療部門つまり政策医療として基本的な部門で金を使おうと、それは赤字覚悟で本来自治体病院というのはやっているわけですが、それ以外のところでどれだけの収益があるのか、収支のバランスが非常に悪かったです。確か80%ぐらいで、かなり低かったと思います。それに、ベッドの利用率が50%ぐらいでしたか、それは末期症状ですよね。あとは人件費とかその問題も大きかったです。報告書を見ると旭中央病院と比べてちょっと高いっていう表現でしたが、それはちょっとまずいなという感じがしました。比べる場所が悪かったという感じがすごくしますけど、そういう経営分析ですね。それは市のホームページで出しているデータをそのまま使うということです。

それから組織機構のあり方、実はここに意見書の趣旨がありまして、前回の会議に事務局長が来てくれました。事務方と看護師の側と医師の側と、それぞれのオペレーションのとり方とかさまざまな問題があるだろうと思います。今まで何も手をつけていないわけではなく、医薬品とか医療機器の共同購入とかいくつかやっていますよね。そういったものを次にこれまでの対応策としてやっていきたいと思っています。

その次に公立病院改革ガイドラインです。そもそも厚生労働省じゃなくて総務省が出すこと自体が効率化の一点で、それを出しています。ただこれも、例えば人件費の問題も公務員の規定があるので、なかなか手をつけられない。そうすると、経営形態の転換とかそういうことも考えていかななくてはならないかもしれません。

ここで、ガイドラインで出しているのは、地域医療のネットワーク化とか様々なものを出していますが、言いたいことはたぶん経営形態です。経営形態を転換する場合には、地方公営企業法の全部適用、それから地方独立行政法人化です。その他に、指定管理者制度、その行き着く先は民間委譲ということになるのかも

しれません。その他には、統合や廃止、それにPFI事業です。これは民間資金の導入ということですが、ヨーロッパだと学校とか刑務所でよく使われています。日本でも病院でやっているところがありますよね。推進法ができたのは1999年でしたか。ですから、それぞれの長所・短所を指摘しておきたいと思います。

それから3つめとして、経営形態を変えなければ本当にできないのかということで、課題や問題点を出しておきたいと思います。その上で、市民病院再生への課題ということで、病院経営の基本的な問題点としてその6つぐらいだろうと思っています。

いくつか繰り返しになりますが、1つは経営形態を変えた場合に、管理者、たぶん病院長になるとと思いますが、どういう病院にするかという基本理念がなければどうにもなりません。経営形態を変えるというのは1つの方策であって、どういう病院にするのかというのが一番の問題です。それがないといくら経営形態を変えたからといって話になりませんので、そういうことがきちっと議論されないといけないだろうということで、そこに5つあげました。

それで、2つめはちょうど最初の会議から市の幹部が出てこなくなりましたけど、設置者と病院側の相互理解ですよね。これなしには前に進みません。そのことをここで出していこうかと思っています。

3つめは、市民病院の新しい役割の構築、言ってみれば政策医療でやられてきた自治体病院が、その役割を終えたという意見もあるわけで、本当に終わったのかどうかということ点を点検します。むしろここでは、基本理念を持つか持たないかということに関わってくるのですが、今の時代にあったどういう役割を見つけるかということです。もうそれに尽きると思います。そうすれば、この病院がどういう方向に行くのか、というところに行き着くだろうと思います。

最後に、患者との信頼関係の構築だけではなく、そこから一歩進めて、新しい市民参加のスタイルを構築することです。地域住民を病院のシンパに変えるって書きましたけど、まずは医師とか病院スタッフが、地域医療を担っているという責任感とプライドです。これは、その次の住民もそうですけど、当事者意識がもてるかどうかにかかってくると思います。他人事では絶対に前に進みませんので、特に住民もそうですけど、自分たちの病院だという当事者意識をもつ、そういうことにかかってくると思います。

とりあえず、こういうかたちでつくっていますので、できたものをとにかく皆さんに見ていただいて、その上で検討していただこうと思っています。なるべく早くやろうと思っていますが、こういうふうにつくってしまうと、何だか大仕事になり、論文のようになってしまって時間が足りなくなってしまったのですが、近々皆さんにお声掛けできるようにしますので、その上で検討していただきたいと思います。これについては、今の報告だけで結構です。できた後で議論してもらいます。

それでは、今日のメイン報告です。A委員よろしいですか。

[A委員]

はい。

議長とB委員からのご指名で、何でこういうお題を頂戴したかという、私がいろんなところへ仕事で行って、こういう会議ではなく、いろんな地域の方と一緒に仕事をしています。そういったことから、何か戦略会議で話し合っていく上でのヒントになるようなことがあれば、というつもりで用意いたしました。今、議長から病院についての意見書の一番最後にありましたように、この会議の場でも私申し上げましたけど、市民の皆さんが選り好みせずに、義理も含めて、市民病院にこぞって受診に行っていれば、問題は極めて簡単な解決をみるわけですよ。ところが、選り好みをして他の病院に行かれたりされているので、誠実性も無い。かたやしかし、無くそうとすると「いや無くしては困る」と、極めてわがままな状態にあるわけです。そのわがままな状態を「ひとごと」という言い方を私はしていますけども、先ほど議長の話にもありました。JTの跡地についてもそうです。こんなものがあつたらいいなと思うのは勝手なのですが、誰がしてくれるかってずっと待っている状態ですよ。本当に自分でいいなと思って、本当に欲しいと思ったら、主役になってくれる人を一生懸命探してみるとか、あるいは自分たちで主役になってみるとか、ということをしていかないといけません。それをするというのを皆さんに求めるわけにはいかないですが、そういう人が出てこない限り、事はまったく動くはずがありません。ひとごとっていうことから「自分ごと」って言葉があるかはわかりませんが、ひとごとではやはり動かないので、自分ごとにしていきましょう、というこの切口で、私が携わってきた経験を少し紹介します。

これが今日紹介する項目ですが、この戦略会議は市民活動、市民団体の集まりで、まちをどうしようかと話し合っている場ではなく、あくまでも市・行政が市政を語っていくために市民の皆さんのお力・お知恵をお借りしようということで開催されているものです。いくら知恵を出したところで、市役所の体制がどうのこうのとは申しませんが、昔ながらの行政ではそのことに応えることはできないだろうと。では、応えられる役所になってもらうにはどうしたらよいか。まずは「行政が変わりましょう」というお話からしていきます。

「行政革命のススメ」と資料に書いてありますが、私は平成15年から20年まで神奈川県三浦市役所の行政革命という表号で、いわゆる行革をやってきました。なぜ行政改革と言わないかという、行政改革というのは、行財政をマネジメントしていくときの手法を、小手先で技術をすり替えていくというか、イノベーションするということだけなのです。例えば、予算が足りないからみんなで痛み分けて、マイナス1%のシーリングでやりましょうとか、採用を控えて見せかけ職員が減っていることにしましょうとか、退職者がたくさん出て採用者を控えるというのは、それはそれで1つのメリットはありますが、決して職員なり定員なりを減らしているってわけではないですよ。職員が少なくなっても動けるような行政体にしていくっていうことを伴わずに、見せかけ職員を減らしていくことでやっていくような、小手先のイノベーションしかしていない。そういうのを今まで改革と称しているのだろうなど。そうではなくて、行政というものの行動とか思考原理そのものを抜本的に変えていきレボリューションしよう、というコンセプトを行政革命という言い方をします。それを少しお話します。

2番目に、「私たちはすぐにでも動き始めよう」。行政は変わろうと思っても変わるために何年もかかるわけです。大きな組織だから、時間がかかるのも無理ないわけです。しかし、私たちはすぐにでも動き始めるだけの機動力をもっているはず。そのいくつかの例をお話します。この話をしていると私はものすごくエキサイトしてくるのですが、なぜかという、私は5年間という任期付きで公務員になっていました。法律上100%混じり気の無い公務員でしたので、兼業とかできないのです。だからその前に勤めていた会社を辞めています。なので、5年たつと、ハイさよなら、で路頭に迷います。一瞬フリーターをせざるを得ない時期がありまして、フリーターではかっこ悪いので会社をつくって代表を名乗

っています。私は5年間勤めて辞めるときに、地元のローカル紙が「5年間ヒーローを演じた乃ちゃん」というタイトルでコラムを書いていました。つまり、私は5年間嫌われ者、悪役だったのです。こんなことをずっと言ってきたから。なぜかという、役所ってというのはやればいって思ってるでしょ、「執行重視」ということですね。予算を消化すればいい、それによって何事が生まれたかとか、何が効果としてあったかということに関心をもたない。誤解のないように申しますと、職員1人ひとりの方がそういうふうにいるということではありません。ここにいらっしゃる職員の皆さんは、自分がこれだけの金をかけてどれくらい効果があつたのだろう、ということに常日頃悩まれていると思います。しかし、生き物としての組織というものの論理です。その証拠に、予算審議はあれだけ時間をかけて必死でやるのに、決算の審議というのは時間をかけますがそんなに必死ではないのです。なぜかという、予算は議会が議決しないと執行できませんが、決算は議会が認定しなくても不名誉なだけで、誰も傷つかないからです。

それから「形式主義」というのは、ニーズに合っているかどうかではなくて、「フォーマットが決まっていますからこの様式でやってください」というその1点張りのことです。

それから「横並び主義」というのは、これも私の言い方をすると皆さん納得していただけたと思いますが、「よそもやっているからうちもやる」という発想です。皆さん商売をやっていて、社長に提案するとします。今度こういう商品で、こういうサービスやりましょうって提案した時、社長はなんて言いますか。「よそはやっているのか?」「いいえやっていません、チャンスです」というからやるんですよ。役所は違います。議会でも役所の中でも「よそはやっているのか?」「やっています、じゃあやろう」と、まるっきり変ですよ。よそもやっているからやるんです。個性を伸ばすっていう発想がなく、よそもやっているから安心ということなのです。

「ばら撒き主義」というのは、クレームがつかないためにばらまいています。クレームがつくっていうのは不名誉なことなので、クレームがつかないようにするためにせっせとばらまいている。補助金が削れないのはこのためです。

「公共独占」というのは、人のことを信用していないということです。役所がやっていけば大丈夫だけど、民間にやらせたら失敗してしまう。私に言わせれば

品質管理を徹底してやっていないというのが役所なので、役所がやっている方が品質は悪いと思いますけど、なぜだか役所というのは伝統的に、役所がやっていたら間違いのない、民間にやらせると失敗する、そういう思考原理があります。

「内部合理性重視」というのは、お客さんに喜ばれるよりも上司にOKと言わせる方に力量を割いています。議会で指摘を受けないための対策は必死でやりますが、市民の皆さんからのクレームには隠れてみたり、ごまかしてみたり、長々と答弁していつのまにか何を言っているのかわからなくなしたり、そういうことを平気でやっています。人が悪いのではなくて、そういう癖がついているのです。皆さん、議会の傍聴をしたことはありますか。匝瑳市議会はわかりませんが、議会の傍聴していると何言っているかわかりません。私は議会の答弁を短くするようにだいぶ指導したのですが、何言っているかわかりません。役所の人々の口癖は全国共通で、「～する中で」「～しまして」を繰り返すことです。あれは何も言っていないことに等しい言葉です。

「中央集権主義」というのは、先ほどの公共独占と同じで、各部局を信用していないことです。企画とかは、例えば保険をやっている部署を信用していない、だからやいのやいのとコントロールしようとしています。これは総括すると、全て管理の論理に支配されているせいなのです。管理というのは英語でいうとマネジメントです。「もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら」という本が流行っていますけど、実は日本語では、マネジメントに類する言葉はもう1つあって、それは「経営」です。管理という言葉は、辞書によると「取り締まる」という意味です。管理教育、管理社会っていう時の管理で、悪いことが起こらないように取り締まるという意味です。それに尽きます。

それに対して、何をレボリューション・革命するかというと、経営・マネジメントというものに変えていきましょう、ということです。経営というのは、よく文字を紐解きますと、「経」の字は縦横の縦という意味です。「営」の字は営繕の営で、元々は建物を建てるという意味です。建物を建てるためには、設計図をかいて、材料を調達して、設計図どおりに組み立てた後、ちゃんと設計図どおりに組み立てられたかという建築確認をして、住んでみて不具合が出たら営繕をして…ということをやります。これはマネジメントサイクルといわれている行為と同じです。何かを計画して、執行して、不具合が無いかチェックをして、改善をし

て、また執行して…という課程をグルグル回していくことで、経営という言葉は極めて合理的にそのことを表しています。経営の論理というふうに変えましょう。

「成果重視」というのは、先ほどの執行主義というものに対して、いくら執行したかではなく、0円だってかまわないのですよ。予算が無くても効果が出てくるようなことをどんどん取り組みましょう。私は実際に0円事業という予算をたてまして、0円事業の方が評価が高かったです。

「改革思考」というのは、形式・書式などが整っているものに対して、それが使いづらいと思ったら、明日から変えていこうという朝令暮改も甚だしいことをどんどんやっていくということです。形式をどんどん変えていき、改革しましょうということです。

「個性重視」は、よそがやっていないことをやっていく。

「選択・集中」は、ばらまかない、選択して集中する。

「市場志向」は、民間を信じる。新自由主義のように、派手派手しく金目の話だけで物事を整理していくのはどうかと思いますが、一定民間を信用する。

「顧客志向」は、内部の了解を得るために注力するのではなく、お客様の方をちゃんと向くということです。

「分権志向」は、企画とか総務とかが威張ってないで、現場の部署に権限を与えていきましょうということです。具体的には、私は当時、予算は各課に総額配分して、その配分の中でやりくりしてくれる分には査定をしないということを決めました。そういう予算編成方式をとりました。今、こういった予算編成方式をとっているところは、全国で20%ぐらいあると聞いています。

こういうふうに変わってくれないと、市民の方がいくら知恵を出して、力を発揮しても、新しいことをしないという伝統的な体質が役所にはありますから、そこを変えていくことがまず根本でしょうというお話です。

その次に1つ目の例として、「私たちはすぐにでも動き始めよう」ということで、「NPO法人みうら映画舎」を紹介します。この写真は、左右同じ建物の写真ですが、右がちょっと前の写真で、左が新しくペンキを塗った後の写真です。このみうら映画舎というものを私たちはつくりました。私たちは、当時市役所の職員でしたが、地元の商工会議所青年部と一緒にNPOをつくりました。CM、プロモーションビデオも含めて、映画、ドラマなどの映像作品をつくっているプロ

ダクシオンは東京に多く、その東京がロケ地を探しているわけです。みうら映画舎というのは、それを自分のところにもってきましょう、そしてロケの対応をして稼ぎましょう、というNPOです。それは何のためにやっているかという説明は後ほどします。ここは年間オファーが350件くらいあります。年間対応している件数はその内150件くらいあります。1つのロケに2日かかるとすると、365日休みなしのNPOで、引き受けで1000万円オーバーの売り上げで、年間約300万円ほどの黒字を出しています。専従の社員は2人位しかいなくて、後は職員も地元の人たちも、手弁当でやっています。なぜやっているかという、自分ごととしておもしろいからです。写真の右奥に実は商店街がありまして、本当に寂れた商店街で、どこかの大臣が熊のために高速道路をつくっているといっぴひんしゅくを買っていましたが、ここは、石を投げても犬にも当たらない、誰も歩いていないような商店街です。だけど、何とかしようということで、月10万円をNPOで出して店舗を借り、メンバーにいる地元のペンキ屋に頼んで建物をきれいにし、お祭りがあつたら店を出して一儲けをしています。何をやっているかという、ロケの誘致もやっていますが、目的は自分たちが自分たちのまちをもっと好きになれるようなことをしよう、それに尽きるのです。

もっと好きになるための戦略を考えました。もっと好きになるってどういうことかなという、「おまえの母さん、でべそ」という言葉があつて、それを子ども時代に言われると腹の立つ言葉ですよね。だから我々もそういう言葉を使いました。でも普段お母さんに向かって悪口を言っているのに、人から「おまえの母さん、でべそ」と言われたら腹が立つのっておかしいと思いませんか。つまり、自分たちは「自分のまちなんて何にも無くてみっともねえよ」と言いながら、よその人に「いいまちですね」と言われたらなんか嬉しいのです。そういう作戦でやろうと。つまり、よそにどんどん顔を出していったり、テレビ画面あるいは映画のスクリーンを通じて自分のまちを露出していきます。そうすることで、相手の人たちが喜んでくださる場面をどんどん体験して、喜ばれたっていうお知らせをお土産として地元を持って帰ってみんなにお知らせすると、自分たちのまちもまんざらじゃないぞ、とすごくうれしいのです。皆さんも経験がおありだと思いますが、例えば映画やドラマで、自分の家の身近なところがロケに使われたりしたら、妙に自分のことのようにうれしくないですか。どうしてでしょう。別にその

作品に自分が関わってもいないのに、普段好きとか思っていない場所なのに、テレビとかで見かけると途端にうれしいのです、人間の心理として。そこをどんどんついていくということです。

左側の写真は、J2の横浜FCというカズがいるチームです。カズがいるチームと組んで活動しています。横浜FCのホームグラウンド・三ツ沢競技場というところに「みうら元気屋」という屋台を出して、ここに三浦というところの物産であるスイカ、マグロのほか、いろんな野菜や魚などを持って行って、ここでガラポンをやったり、物を売ったりして、これもけっこう儲かります。それとJ1の川崎フロンターレとも組んでまして、フロンターレのホームグラウンド・等々力競技場でも年に何回もこういう屋台を出してやっています。三浦デーとかをつくってもらい、その日の試合のMVPにマグロ1本差し上げますとか、そういうことをやっています。マグロ1本をどう調達するかというと、マグロ問屋に行って、「今日〇〇問屋からマグロを1本いただきました、ということ等を等々力競技場のオーロラビジョンに出しますから、1本ください。」と、口説きます。マグロ1本高いですが、それでもうれしいのです。あろうことか、横須賀スタジアムの客席でマグロ解体ショーをやったりしているのです。お客さんは、試合中に試合を見ないでマグロ解体ショーに夢中なのです。それもうれしいのです。うれしいから地元の人たちも手伝ってくれるのです。「あなた、まちの宣伝しなさいよ」と言われたら「何で私がやらなければいけないの」と思うかもしれませんが、おもしろいことになれば、事実上まちの宣伝を担うことに楽しさを覚えるのです。行政も「それは観光課の仕事でしょ」と、ひとごとになってしまうのです。ひとごとじゃなくて、自分がやっている職業とか、自分が持っているいろんな資源があるわけで、そういう資源を使ってこういうことやろうよって、ひいてはまちの宣伝になるからうれしいことでしょ、というふうに巻き込んでいくことで自分ごとになっていくのです。

右側の写真は、東京神田・鍛冶町のあたりに、明治大学プロデュース三浦市東京支店「なごみま鮮果」というお店があります。これは三浦が本店で東京が支店ということです。都心にいわゆるアンテナショップをもっています。これは家賃0円で、三浦市はお金を一銭も払っていません。明治大学が文部科学省からの助成金を使って全部面倒を見てくれています。このご縁があって、私は明治大学に

お世話になっているのですが、運営は学生たちが行っています。これも地元の人たちが「そんなことなら自分の商品を置いてほしい」と言ってくるのです。「ふりかけをつくったから置いてほしい」とか「まんじゅうをつくったから置いてほしい」など、頼まなくても持ってくるのです。持ってきてくれること自体が宣伝になるのです。彼らは別に宣伝をする役割を負おうという思いはないのです。自分の物を売りたいから置いてくるのです。でも結局それが宣伝になるということを経験的に覚えてくると、自分たちも宣伝の一翼を担うことができているのだと、できているなら、もうちょっと工夫して商品をつくり、喜ばれるような商品を買ってみようか、ということが始まるのです。なので、観光課なんて仕事なくなります。民間財源だけで、まちの宣伝がどんどん動いていくわけですから。役所がやっているのは、こういうしかけの基盤をつくることなのです。例えば、大学との交渉であるとか。

みうら映画舎やみうら元気屋は、議会で支援予算をつけなくて良いのか、ということはずっと言われていますが、担当の部長さんは議会の委員会で「予算がないからできていることであって、予算つけたらつぶれます」と、予算付けを拒否し続けています。これは、役所の予算が入ったら依存心が出てしまい、たぶんみんなやらなくなります。お金がないから知恵が出てくるのです。そこにお金をつけたら知恵が出なくなります。なので、議員が提案する予算付けを拒否していますが、おそらく全国でも珍しい委員会でのやりとりが行われています。

ここまでの内容をおさらいします。政策的要求は往々にして「ひとごと」で、期待感ばかり増幅して期待はずれに終わります。例えば、道路が拡幅されてくれれば物流が変わり取引が増えるっていう幻想をもっています。J T跡地に何かつくればにぎわいを取り戻して、商店街が活性化するという幻想をもっています。私は予言者ではありませんが、おそらくそうはなりません。なぜなら、ひとごとでつくったものに何の効果があるかわからないからです。駐車場を整備すればお客が増えて、売り上げも増えるっていうのはありえませんが、期待はされます。産直施設を整備すれば、客が増えて売り上げも増える、しかし、日本全国どこの道の駅が成功していますか。成功しているのはほんの一握りですよ。しかも政策的要求は往々にして利害対立を招き、対立調整に時間がかかって実行できないし、もしかすると、そんなことをしたばかりに地域がギクシャク

する原因にもなってしまいます。こっちの道路拡幅するのが先だろって話になります。こっちの駐車場をつくってしまったら、駐車場ばかりに客が行って他が寂れてしまう。実際に私が勤務していた三浦市では、これによって裁判が何件も起こっています。産直施設も同様です。そういう経験をしてきているので、私たちはひとつとベースでの要求や期待は一切しないということを心に誓い、全部自分ごとにしてしまいます。自分ごとであれば誰にも文句を言わせないし、自分が好きでやっているのだから、言われる筋合いもないわけです。自分ごとであって、しかも周囲に対する利益誘導を盛り込む工夫は常にしています。市役所の若手・中堅職員と地元の商工会議所青年部（YEG）でNPOをつくって、政策と連携はするが、公費は使わないし、公費に対する期待もしない。テレビやスクリーンで自分のまちが出てきて喜ばない人はいないし、弁当屋さんはロケ弁需要で大喜び。年間に何万食ってというロケ弁が出ます。弁当屋にしてみれば、何万食出るっていうのはすごいことですよ。20店舗ぐらいと業務提携して、ピンはねを契約しているのです。弁当が600円だったら、NPOが5%とるとか、あるいは、700円以下だったら一律50円とか、そういうふうにして、ピンはねをどんどんします。だから儲かっているのです。それでも弁当屋は出したいと言います。しかもおもしろいことに、弁当屋さんが20件ぐらい提携したときに、だんだん何回かやっているうちに、弁当屋同士がコソコソ話し合っているのです。ピンはねの率が高いとか文句を言い始めるのかと思いきや、そうではなく、定期的にロケ弁が出てくるのだから、自分たちでプラスチックの弁当の容器を共通のものにしましょうって話し合いをしていました。そうすると、みんなで持ち回りで共有して、無駄を出さないで済む、ゴミを捨てる時にも重ねて出せば容量を減らせるので、ということを前提に話し合いをしたりしているのです。これってスケールは小さいですが、すごいことですよ。そんなことまで生まれてくるのです。自分ごとでやっていけば知恵が出るので、結局社会の役に立つということです。

こういった成功体験は、次々と別の動きを誘発していきまして、B-1グランプリというB級グルメの祭典で、三浦市のマグロラーメンが第5位になりました。シティセールスという点では、平成19年度に優秀観光手作り賞総務大臣賞金賞という賞を受賞しました。見ている人は見ているし、お客さんも来ます。このまちの観光客はその昔700万人いました。この取組みを始める直前の平成

14年には470万人まで落ちていました。それは海水浴を人がしなくなったからです。現在、こういった取組みの成果もあり70万人増の540万人まで戻しました。役所は何もやっていません。役所に期待をしないで自分ごととしてやってきているので、この成果が生まれてきているのです。だから、役所は相変わらず観光協会とかにお金を出して、ゴミ箱にいくようなチラシとか観光パンフレットをつくっているのですが、それは全部やめてくれと言っています。その分よこせとかは言ってないですよ。やめて、他の福祉とか教育とか必要なところに回せということです。そういうことを言っていますけど、やっぱり役所もなかなか変わらないところがあって、それはそれ、これはこれ、というふうになっています。

次に、ボランティア市場っていうコンセプトでの事業を紹介します。あっという間にグループをつくってしまう仕組みです。皆さんやってみればすぐわかることですけど。ボランティアの人集めが大変だとか、グループとして活動するのが大変だとか、グループをつくっていくことは面倒くさそうじゃないですか。これは30分でグループがいくつもできますから、ぜひ皆さん真似してください。これを共通の言葉で言えば、ひとごとであったものを自分ごとにしてしまおうということなのです。どういう仕組みかというと「こういう活動があったらいいな」というひとごとを、札でいっぱいつくります。自分ごとじゃなく、ひとごとを書いた札をいっぱい並べます。一旦作業をやめて一度札から離れて、今度は自分が興味のある札のそばに立ちなさい、と指示を出します。つまり、元々ひとごとで書いた札なのですが、自分が書いたものに責任をもてなんて言わないで、人が書いたものでもなんでもいいから、好きな活動メニューの前に並びなさい、というふうにやります。そしたら、同じメニューに複数人並ぶのです。はい、話し合いをしてくださいとやるのです。人同士は話をしていると、すぐ仲良くなれるので、グループ活動がすぐにスタートします。30分で何十ものグループができます。平成7、8年ぐらいに横浜市西区というところでこれを初めてやりましたが、そこでやったグループが今でも活動を続けています。当時11のグループができましたが、そのうち3つぐらいはまだ続いています。市場っていうのは、つまり競りをするイメージです。活動メニューを商品として、この商品のところに集まれ、とやります。元々他人が書いたひとごとの札なのに、いつのまにか自分ごとになってしまう、という仕掛です。ちょっとした工夫です。

鹿児島県与論島、一定以上のお年の方は一時期日本最南端だった島なのでご存知の方も多いと思いますが、日本全国にアンケートをとると認知率7%、あまり知られていない島です。私はこの島の観光大使をやっています。

そこに与論町観光ルネサンスという会議がありまして、その委員長をやっていました。その縁で観光大使になったのですが、問題意識は何かというと、沖縄が占領下にあったころは日本最南端で知られていました。沖縄の返還後に、いわゆる離島ブームというのがありまして、リュック背負って一人旅みたいな人がやたらやってきたのです。当時、観光客が約14万人という時代もありましたが、今は5万人くらいしか来ないという状態で、観光客が激減しました。気をつけて聞いておいてください。これはルネサンスを企画した与論というまちの政策です。観光客が激減したのだから、観光政策によって観光客を増やそうと考えたのです。だから、観光業者は努力しよう、というものです。私はこれを聞いて、問題意識そのものがずれているなって思ってしまうのがなくて。離島ブームのときに、若者たちが自分探しの旅をリュック背負ってやっていた、これは観光でしょうか。旅であることは間違いのないけれど、観光という代物ではないですよ。観光とは、温泉へ行くとかどこかの施設に遊びに行くとかそういうもので、何も無い離島に行くことは観光とは言わないのではないかと。しかし、言葉のトリックで、観光業者さんたちにどうサポートするかとか、どういった活動を求めるとか、そういう議論の仕方をしているのです。観光業者に何がいるかということ、旅館、民宿、ホテルにせいぜいおみやげ屋ぐらいで、5千人の町なのでそんなにたくさんはいません。宿も当時100ありましたが、今は30しかありません。もう顔が見えている範囲です。なぜ観光客が減っているかという調査を私がしてみると、与論島にしかないような生活とか風景を求めてきているのに、やはりご多聞にもれず都市化をしているものですから、魅力がなくなってきた、ということだけなのです。それなのに、リゾートを造ろうとか言っているのです。私から見たらちゃんちゃらおかしくて、リゾートを造ったらお客さんが来ると言っているのですが、そんなもの造らなくてもサイパンに5万円で行けるのに、8万円かけて与論町にはまず来ないですよ。聞いたこともない与論島に行ったという話を聞いても自慢話にもなりません。サイパン行ったよ、という話の方がいいじゃないですか。消費者は普通に動いていますから、匝瑳に行ったと言っても誰も自慢話にならな

いですよ。でも、やり方によってはそのうち自慢話になるのです。独自の文化が発揮されなくなったからなのです。

では、独自の文化って誰が担って育ててきたかということを考えるべきですよ。それは島民全員なのです。観光業者は地元の文化を作り上げてきた人ではないですし、地元の文化を発露した人でもない。もちろん地元の人ですから住民としてはやっていますよ。島唄歌ってみたり、踊ってみたりということをやっているわけです。だけど、観光業としてはやっていないわけです。島民全員が責任者なのに、観光業者だけにやらせようとしているところが大体おかしい、ということを描いているのです。

例えば、農業やっている人は関係ないのかというと、大有りです。道を歩いていけば全部さとうきび畑ですから、道路と畑の境にブーゲンビリアとかハイビスカスとかを植えて花を咲かせれば、それだけでも見に来る人がいるかもしれない。ラベンダーだけで行ってしまう富良野という町があるくらいですから。ところが農家は何をやっているかということ、邪魔だからといってブーゲンビリアやハイビスカスの花が咲いてきたら平気で切ってしまうのです。だから人が来なくなっているのです。そのことに気がついていません。それをさんざん言いました。つまり、観光振興ではなくて文化のルネサンスだと。ルネサンスは文芸復興ですから、まさしくルネサンスしないとこの島はやっていけないよと、さんざん口すっぱくして、委員会といいながらも独壇場でやりました。ですから、最初のうちはすごく怒られました。よそから来て、よく知りもしないあんたにそこまで言われる筋合いはない、とかなり叱られました。

叱られたら叱られたことでその夜呼び出して、激しく酒を飲む島なのです。3日と空けないで、みんなずっと二日酔いで仕事をしているみたいなまちです。与論献奉っていう作法がありまして、まず施主を決めて、黒糖焼酎を杯にたくさん入れてもらって、まず毒見をしますといって一気に空けます。今度は施主から、主賓を始め参加している人たちにグルグル注いで回していくのです。1周したら今度は施主が交代します。なので、いる人数分だけ杯を飲まなければならないのです。これは神様に捧げる酒、という飲み方なのですが、そういうことをやっています。その後、ひたすら怒った連中と一緒に飲みます。飲めばわかることですが、何を言い出すかということ、「いや実は腹が立ったからそういうふうにしたけ

ど、みんなここ（のどもと）まで思っていることなんだ」と告白し始めるのです。ぶつけてぶつけて、ここまで思っていることをやるのです。

三浦で仕事をしているきっかけも、私が業者として三浦の総合計画というものの策定の仕事を請けていたからです。その時に、総合計画審議会という会議がありまして、その審議会に「こんなまち、誰も住みたいと思いませんよ」「市民みんながわがままで、自己中心的なまちです」と、本質的だと思われる課題を一斉にやったら、ものすごく叱られました。業者風情が何様のつもりだと。その後、やっぱりよそものを排除する論理がこのまちにはあるとかっていう話をしていたら、マグロ問屋の社長が「私も婿入りして40年になるけど、いまだによそもの扱いされています」と言い始めたのです。そこから打ち解け始めまして「いや、あんたの言っていることはみんなここまで思っていることなんだ」「あんたすごい」「役所に入れ」という話になって、ここから先は私も想定外です。つまり、みんなが本当に思っていることをちゃんとぶつけてやって、自分の問題であることを気づかせてあげる、自分たちも自分の問題であることに気づく、そういうコミュニケーションをしなきゃいけないという例です。

これで最後です。今回震災があつて、寄付などが話題になっています。私たちもいろんなことをやっているのですが、そのうちの1つに、「Just Giving Japan」というしくみを使って、寄付集めをしています。これは、私たち普通の人たちにできることは「寄付をする」ことだと思いませんか。今回義捐金と支援金の違いが大きな話題になっていますが、募金は大体義捐金で、義捐金がわからないということになると、何か募金して損したなという気持ちになるじゃないですか。支援金は実際に活動している人たちにいき渡り、活動費用に当てられるから喜ばしいことなのです。いずれにしても、自分が何かをしているわけではないのです。募金をして、後は任せたということをして悪いと言っているわけではありません。それはそれで必要ですが、寄付をするというのは、非常に消極的な行為ですよ。心根の良し悪しを言っているのではありません。客観的に見れば何かの活動はしているわけです。そうではなくて、これは「寄付を集める」人になりましょうという仕組みなのです。どういうしくみかという、実際にある例をお話します。

プロ野球選手で元ヤクルトの古田敦也さんっていますよね。古田さんがこの「Just Giving Japan」という仕組みを最初にやりました。ある人がチャレンジを

します。そのチャレンジというのは、ある人のやりたいことにかまいません。そのチャレンジを応援してくださる皆さんからお金を集めます。そのお金は、私が支援したい〇〇というプロジェクトの資金として私が責任をもって送ります、というしくみなのです。古田さんは、ホノルルトライアスロンに挑戦します。彼は、不登校とかをサポートしているNPOと仲が良く、そこを支援したいから、自分のホノルルトライアスロンにチャレンジするその心意気に賛同してくださる方は、お金をください、そのお金をNPOに渡しますと。この活動とホノルルトライアスロンは全然関係ありません。でも、ここがおもしろいところで、ひとごとにしないということです。自分が自分のチャレンジをする、そのことを巡り巡って社会の役に立つ活動をしている人たちにお金を送り込む、という仕組みになっているのです。これは、ハイチの大地震があったときに、イギリスで7歳か8歳の男の子が、毎日自転車でグルグル旅を続けるということをやって、その自分の熱意に賛同してくださる方はお金をくださいとかけずり回って、何千万円も集めました。それがモチーフなのです。「寄付をする」のではなくて「寄付を集める」人に一人ひとりになりましょう。

実際にありそうな例は、ダイエットです。私が自然環境に興味があるので、小動物の愛護をしているNPOに、皆さんが私のダイエットを応援してくださる気持ちをお金に代えて、寄付してください。ダイエットとNPOの活動は全然関係ありませんが、この人が頑張り、その姿に対して賛同する。この人に委ねたかたちでお金を当てはめていく。寄付している人は、チャレンジャーになればいいわけです。私は禁煙しますとか、毎日朝5時に起きるように努力しますとか、これはできたかどうかを問いません。とにかく、寄付を集める人に一人ひとりになりましょう、能動的に社会にコミットしましょう、ということを進めている仕組みになります。誰に何を託したいのかということを確認し、自分ごととして寄付を呼びかけ集めるのです。「トライアスロンを走り抜きたい」「ダイエットしたい」これは全部自分ごとなのです。この人のために寄付をくださいと言って募金活動をするのではなく、自分の努力や熱意を応援してもらい、という環境を社会で作っていくのです。

これは例が違うのですが、今回の震災関係でいうと、シビックフォースという被災地で活動している団体があります。その団体のために寄付集めそのものを弊

社・ビズデザインがチャレンジしました。目標額50万円を1～2週間の間に集めたい、ということにチャレンジしました。そうしたら2週間ぐらいで40万4千円集まってしまったのです。40万4千円集めたといえばカッコイイのですが、誰から集めたかは大体分かっています。全部知り合いです。知り合いに私たちは宣伝したのです。そうしたら、2千円だ3千円だってどんどんくれます。全部で40件ぐらいでしたが、寄付を集める対象は知り合いでかまいません。古田さんぐらいの有名人ならともかく、誰も見ず知らずの人がダイエットするからってお金はあげないですよ。自分の知り合い、家族、職場の仲間、地域の人。自分が明日から絶対風邪ひかないように、乾布摩擦する、その努力にほだされたら、実はあそこの老人ホームに寄付したいと思っているから、みんな俺を応援するつもりで千円でも2千円でもよこしてよ、ってというようなことをやるのです。それで、お金が集まってくるのです。非常にユニークな仕組みですが、確かに効果はあります。ライブドアのホリエモンは、この仕組みで4千万円集めています。古田さんもそうですし、モデルのSHIHOさん、蛭原友里さんもこの仕組みをやっていて、いろんな人がチャレンジをして非常に効果を出しています。

こういうふうに、ひとつごとから自分ごとへ、ひとつごとにしないということ、理屈で共有するというのではなく、そこに意識の共有というものを持ち込み、自分ごとにしてしまう。それができなければまちなんか動かないし、行政の方が何していいかわからないし、ひとつごとにしているうちに、夕張みたいになってしまいます。なので、病院の話も、JTの話も、学校の話も、この場で話題になっている話は、こういうものがあつたらいいなという話ではなく、自分だったらこういうことをしたい、あるいは普段からやっている活動をもっと広げていきたいなど、主語を「私」にして、話し合いを進めてみるといいかなと思って、お話をさせていただきました。以上です。

[議長]

すごいですよね、最初から最後までひとつごとから自分ごとへという論理が貫徹されていて、結局、A委員の話からすると、ひとつごとから自分ごとにならないと、その地域の地域文化とか独自性とかができないということですよ。それができなければ、今のサイパンの話じゃないですけど、努力ができない、やっぱり自分ごとになって初めて、地域の個性、広い意味では地域文化を創造できるってこと

に尽きるのだらうと思います。ボランティア市場というのは、我々もひとつひとつで札をつくらせてもらって、自分の興味があることを生かして、やっぱりひとつひとつから自分ごとへと、非常にうまい仕組みだと思っています。皆さんで、A委員に質問や聞いてみたいことがありましたらどうぞ。

[C委員]

4月3日に、天神山で花祭りをやる予定でした。今桜がとても綺麗ですけど、3日の日には2つか3つしか咲いていなかったと思います。すごく寒い中、盛大にやる予定でしたが地震があったので、盛大にはできませんでした。それでも市内木積地区で、藤のつるで箕をつくっている人がいて、松戸や船橋などの遠方からやってきて1年間勉強している人たちがいます。その生徒たちの簡単な卒業式をそこでやりました。それも地震があったので、宣伝をあまりしなかったのですが、口コミで何人かの方が見えて、被災地への募金をしたところ、10万円の募金が集まりました。そのお金をすぐそのまま旭市飯岡地区の福祉の方にもっていき、そこにいる人たちに使ってもらいたいということで渡してきました。その時に思ったことですが、来年もちゃんとやりたいのですが、集まってきた人は口コミで、何人もいなくてもやってくれるということ。そして、箕というのは伝統文化で、藤のつるを裂いて編んでいくわけですが、悲しいことに匝瑳市の参加者は少なくて、遠くの船橋などからわざわざ通ってきてくれて勉強している方とか、何人かいらっしやいました。本来、地震がなかったら、歌ったり踊ったりすごくにぎやかにお店も出してやりたかったのです。この間、先生のお話を伺って、みんなで何かやらなきゃと思って、思い切ってやってみました。

[議長]

これは、戦略会議の成果ですね。

[C委員]

市役所からはお金を一銭ももらっていません。また来年も予算はいただかないで、みんなでまちのためにやろうと思っています。陰ながら応援してください。よろしくお願いします。

[議長]

箕づくりは伝統文化ですが、ほとんどはよそから来た人ということは、地元の人には地域にある伝統文化をあんまり認識していないのでは。

[C委員]

知らないのではないですか。

[D委員]

知っていますけど、それを習ってどうのこうのというのはなかなか難しいのでは。

[C委員]

無くしてしまうのはもったいないです。今女性の方が1人で先生をやっているのですが、いい方ですよ。

[D委員]

実際私たちは、その箕を使わないし、今その箕がいらなくなってしまったのです。うちの方だって箕を作っている人はいるし、茨城の方まで売っていた人もいます。みんなそうやっていたので、箕のことを知ってはいるのです。

[C委員]

でもだんだんやる人がいなくなったら無くなっちゃいますよね。

[E委員]

売る人がというよりは、買う人がいないのではないですか。

[D委員]

値段が高いですからね。1万円ぐらいするのではないですか。

[C委員]

でも作るのは大変ですよ。藤のつるを裂くのですから。

[D委員]

それを言い始めたら、いろいろ作っている人はいっぱいいますが、それで生活が成り立つのかどうかという問題がありますし、難しい話ですよ。

[C委員]

見ていてすごく一生懸命やっているので、素敵でした。お金の問題ではなくて。

[F委員]

今日の朝日新聞に出ていました。

[D委員]

箕は保存会で守っていくことになっていますよね。

[事務局]

国の重要無形民俗文化財に指定されましたので、その活動は市としてもサポートしています。

[議長]

確かに今、箕はあまり使いませんが、同じ様に紙の世界で和紙をすくのも伝統工芸の一部になってしまっていますが、新聞とか雑誌などはほとんど洋紙ですよ。和紙が、パソコンで使うプリンターのインクジェットと、ものすごく相性が良いのです。それを組み合わせて、様々な新しいことをやろうという人たちがけっこういますよね。ですから、普段使われない箕を作っていて、売れないからしょうがない、ではなくて、それを使って何かできないかと。

[C委員]

小さくして携帯のストラップにするとか。

[D委員]

八日市場でも、小さくコンパクトな箕を作っていますよ。

[E委員]

うちの方では、今でも隣の多古町から売りに来ますよ。

[議長]

ひとつごとから自分ごとへということで、今そこに話をもっていきましたが、ほかにはどうですか。私は最後まで興味深かったですね。最初から最後までひとつごとから自分ごとへという論理で貫徹されていますので、E委員いかがですか？

[E委員]

自分も農協の組織に所属し、青年部に入って3年目になりますが、青年部といってもほとんど40～50代が多くて、その人たちって結局集まって、ただ酒を飲んで終わりなのです。青年部として何かやろうという提案もないし、提案してもそんな金はないと。無いって言っている割には、毎回お酒を飲んでいるのです。せっかく集まるのだから、ネギ屋の多い青年部でネギを使った実験をやろうということで、問題はお金をどう集めるかなのですが、農協にお金を出してもらおうと思っても、何かを売るわけではないので予算がないわけです。土地も必要だし、誰が土地を借りるのかという問題もあります。

でもやり始めると、けっこう意見が出てきて「うちに種が余っているからそれを使え」「こう実験をやってみよう」とか、どんどん話が出てきます。そういうふ

うにやっていると、年配の人が徐々にやめていったという話もありますが、でもやってみると、今まで酒を飲んでいるだけの人たちが「こういった考えもあるんだ」と、自分から考えて動くようになっていきました。何かやろうというきっかけが少しでもあれば、農家ではなくてもいろんなところで可能性があると思います。箕も、あとは話をどう持っていかだと思いますが、伝統工芸というのも大事ですが、それを残すための仕組みも考えなければならないと思います。

[議長]

今日のA委員のお話は、大事なメッセージが行政にも向けられていましたが、事務局いかがですか。

[事務局]

聞いていて、少し耳が痛くなってきました。発想の転換といいますか、今までの行政の体質というものを、どんどん変えていかなければならないと思いました。

[事務局]

先ほど、本質的な部分という話もありましたが、職員もここまで思っているのはあります。では、匝瑳市でも実践していこうとなった場合に、やっぱりちょっとハードルが高いな、という感じがします。なぜかというと、自分ごとということを市民の方にどれだけ理解していただくか、それがやっぱり行政の中で、逆に課題になってくると思うからです。市民の方が、A委員の言われたとおりの形になっていただければ、今、市の予算も使わないというお話もありましたが、使ったものがより以上、何倍にも効果が表われる使い方ができると思います。今、話をどれだけ跡地利用だけではなく、行政全般、行政と市民でどれだけ向かい合えるか、本音でやれるか、それをどのようなプロセスでやっていくのか。戦略会議の団体の代表の方だけでは難しいでしょうし、市民全員集めてやるのも難しいでしょうし、実際にやっていく過程の手法が難しいという感じがします。でも実際動いている例があるわけですから、そういう先進事例をいくつも勉強して、匝瑳市に合ったかたちで、行政側はお金を出すのではなく、ソフト面の問いかけや情報提供も含めてやっていくことが必要だと、考えさせられました。

[A委員]

今、事務局がおっしゃったことは、概ねそのとおりだと思いますが、意外と簡単にできることなのです。匝瑳市役所についてはよく知りませんが、私自身がや

ってきたことと言えば、市役所では地域の活動とか、団体の補助金をいっぱい出していますよね。補助金を減らさなければならないと、毎年その交渉に汗をかいていることとは思いますが、よくよく調べてみると、その団体の事務局的な役割まで役所がやっていることが多いのです。補助金の交付申請も職員が書き、補助金の執行報告書も職員が書き、交付事務も職員が行っているということがあります。そんなことをしていたら、補助金をもらう団体はひとつですよ。ひとつの金ですよ。自分たちが説得して、自分たちの力量を理解してもらって獲得する補助金ではないですよ。だからそれをやめればいいのです。補助金を出すなというわけはなくて、自分ごととして補助金の獲得を頑張ってやっていただくということです。申請者と交付者が同じ人という現象は、住民訴訟とまでは言いませんが、あからさまにしたら大変なことになるような実態が多々見受けられます。ちゃんと申請書を出してくれなければ交付しません、というごくあたりまえのことを宣言すれば済むことなのです。

[議長]

先ほどのA委員のお話に、スケールが小さいということがありましたが、それは言い方を変えれば、身近なすぐできることをやっていくということだと思えます。

[B委員]

知識というか、このまちに参考になるかというのがありますが、やっぱり今日のA委員のお話は、聞いててムズムズしてきました。理屈はいいから、ムズムズしてきてほしい。ムズムズする人をよくよそ者、バカ者、若者って言いますが、そういう意味では、C委員が早速美しいバカ者になったかもしれません。先ほどのボランティア市場ではないですが、少しずつ人が集まってきたということはひとつではなくて、要するに、私自身もA委員もムズムズしたいのです。ムズムズしたい仲間を増やしたいのです。だから学識としてくるのではなく、バカ者の代表になりたい、そういうような中のムズムズの会議にしませんか、という問いかけなのです。そこの発想を変えないと、みんなムズムズしたくなる、ムズムズしてここが楽しくなればまたムズムズした人が増える、ということです。だからムズムズしましょう。

[A委員]

私も、行くのに半日かかる与論島に毎日行きたくてしょうがないのです。今、与論島がムズムズしているのです。

[C委員]

水牛かなんかが歩いているのは与論島ですか。

[A委員]

そういうのもいるかもしれません。「どこなんだ与論島」というキャッチコピーを我々作りまして、それを掲載したTシャツを作ろうという話が飲み会の場で決まり、早速発注しようということになりました。その場で書道の先生に書いてもらって、その場でTシャツのデザインを決めて、もうすぐ出来上がってくるのですが、誰が売れるかは後の問題ですね。たぶん、私も売れということで何百かは引き受けることになるのでしょーうけど。

[C委員]

匝瑳市も、俳優の高橋英樹さんが来て触った木というのが飯高檀林にありましたが、それがどの木であるかはわからないのです。けっこうロケで使われていますよね。いいところがいっぱいあるのです。やはり、三浦市のようにいろんなロケに使ってもらえるように、どんどんやってもらえればいいなと思います。

[A委員]

うちの方に、パク・ヨンハが座った椅子がありましたね。それを見に、広島や名古屋、北海道からどんどん人が来ていますよ。

[C委員]

飯高檀林ではそれを隠しているみたいで、教えてくれないというか、立て札でもあって教えてくれるといいのですが。匝瑳市はみんないい人ばかりで、でしゃばらず、内緒にしてくれるのです。

[D委員]

この間の「ゲゲゲの女房」も無かったですよね。撮影現場を撮ったフィルムがないかと訪ねたら「無い」と言われました。あまり市では広報しないですよね。

[事務局]

フィルムコミッションというかたちで登録すると依頼があります。NHKはディレクターといえますか制作会社が気に入ってしまして匝瑳市によく来ますが、あまり人が集まりすぎると撮影に支障が出てしまうので、事前にロケをやりませ

という告知はしづらいのです。

[C委員]

撮影が終わった後でもいいので、この辺を撮影しましたよという立て札を立ててくれるとありがたいですね。

[E委員]

今言った、撮影した風景を写真とか映像で収めておいてくれると、後でこういうところに来た、というのがわかりますよね。

[A委員]

それは著作権の問題とかがあって簡単にはできませんが、静岡に伊豆の国市というまちがありまして、そこは制作サイドと市長の間で協定書を交わし、制作のバックグラウンドについて撮影したものなどを、後々市のPRのために使ってください、使わせてくださいという合意協定書をつくっています。そういうことを丁寧にやっていき、それでお金をどんどん宣伝に使っています。ロケ現場で休んでいるところの写真なんかを使って、憩っている様子などをPRするような宣伝の仕方をしています。そういうところに、役所の出番はあります。

[議長]

随分前に、野手浜の海岸沿いの野球場で撮影があり、テレビドラマの中でさばカレーが出てきましたよね。結局、匝瑳市ではなく銚子市でつくることになりましたが、匝瑳市でさばカレーをつくろうという発想は出なかったのですか。

[G委員]

A委員の話を押聴してきて、非常に面白いと思いました。神奈川県の商品観光課に鈴木さんという人がいて、いろんな面白いことをやっています。1つは、県庁職員のことですが、土日祭日・昼夜関係なくして、地域に出て行っているような活動をしています。お金はからないから口を出すなという基本的なスタンスが地域の人たちの中にできていて、それが活動の中で読み取れるわけです。観光は「観る」という字を書きますが、そのことに関しては商業も一般観光も同じでしょうけど、「観る」という時代の観光はもう終わっていて、「D o」といいますか「する」ための観光あるいは広く「旅」ですね。それが20年ぐらい前から伸びてきていて、すでに5～10年ぐらい前からはさらに「B e」（知的好奇心を刺激する旅）というようなスタイルに、観光とか旅そのものが変わってきています。何か

があるからそれを見てください、というような誘致・意識ではやっぱり難しいと思います。それよりもさらに進んでいる今のやり方、「Be」みたいな観光のやり方、外からも人を集める、みたいな発想にしないと無理かもしれません。

[B委員]

例えば、今のお話なんかも市民病院再生と考えてしまうと止まってしまいますが、市民病院再生は文化だ、市民病院再生は自分の存在だ、みたいなところに置き換えてみるのはどうでしょう。映画を呼んでくるみたいなまちづくりは、もういろんなところが真似しているのです、病院再生が映画になる、ドラマになることをやってみようとか、よそとは違う発展をまた考えようとか。先ほどのG委員のお話を、観光ではなくて病院に当てはめたらどうなるだろう、そう考えたら面白くなりませんか。ムズムズしてきませんか。

[議長]

PRの仕方ですが、今のB委員のお話だと、例えば専修大学なんかは創設者のことを映画にしてみたりしていますよね。電車に乗ると広告なんかで見かけます。有名な若手俳優を使って、そういうのを作っていますよね。だから、従来の観光概念では、この匝瑳市ではとても無理があります。やはりそこに住んでいる我々が、何らかのかたちで価値観をつくり出して行かなければいけません。

今日のA委員のお話は我々にとって非常に有益な話で、今後この会議を進める上で肝に銘じてやっていきたいと思います。

残りの時間で、匝瑳市の航空写真を見ていきます。

[事務局]

地図の縮尺は1万分の1で、この赤いマグネットがついているところは、JT跡地、旧米倉分校、旧飯高小学校の位置を表しています。

[議長]

この地図でそれぞれの施設の位置関係を確認していきたいと思います。匝瑳市出身なもので、私の方で知っている限りはお答えしますが、後は皆さんで補足してもらいたいと思います。特に旧飯高小学校の周辺は、私にはどうも地理感覚がないもので、D委員に補足をお願いします。

先日の帰り、夜に車でA委員とB委員と一緒にJT跡地の脇を通ってきました。駅のロータリーから商店街に向かう入り口にありまして、そこから旧道に入って

いくと、従来の商店街、多田屋さんとか鶴泉堂さんとか坂本さんとかがあるところ。この市中心街の駅からの入り口にあるのが、最大の特徴です。

旧米倉分校は旧道沿いにありますが、ちょっと奥に入ったところで見にくいところですね。あの辺はかつて市街地の延長線上で、醸造業など賑やかなところがあったのですが、今はちょっと寂れていますよね。しかし、この先に飯倉があって、近年匝瑳市域でもっとも人口が増えているところですね。その地域にあるところなので、そこをどう利用するか。

あと、旧飯高小学校の方は一度行ってはみましたが、何にもありません。飯高檀林跡がありますが、市のマスタープランではこの辺は文化的な何とかがっていう位置づけですね。

ですから、3つが全く違った位置づけにあるということで、それをどう活用していくかだと思います。飯高檀林跡周辺は、何で文化的な位置づけなのですか。飯高檀林跡があるからですか。

[事務局]

そうですね、後は自然・里山とか。飯高檀林跡があることが一番の理由だと思います。

[議長]

でも、そう言われると、須賀の方でもハリストス教会がありますよね。山下さんの絵は文化財に指定されていて、私は見に行きました。ハリストスはキリストという意味ですが、そういうものがあるし、商店街にも先日B委員に鶴泉堂さんの建物を見てもらいました。さまざまな文化施設が点在して、私はマスタープランの中の位置づけが、文化に対してはなかなか難しいのではないかと感じました。それで、これら3つの跡地は実際にどういう風に利用されているのですか。D委員、旧飯高小学校はいかがですか。

[D委員]

今、小学生は八日市場小学校に通っています。例えば、飯高地区の子ども会で使う場合には、校舎は教育委員会から借りるというかたちをとって、グラウンドと体育館は区長会長が管理し、いつでも使える状態になっています。年に3回ぐらい、子どもたちで使っています。

[事務局]

現状、旧飯高小学校は利活用されていないということです。J T跡地は、新しい動きがありまして、今まで土地開発公社で先行取得したというお話を申し上げました。戦略会議でいろいろ検討をお願いしているところですが、実際に活用できるまでは若干時間がかかるだろうということで、年度が変わってこの4月に市へ買い戻しをして、とりあえず当初の取得目的である商工観光施設用地として、多目的に使える暫定利用をやっていこうということになりました。例えばフリーマーケット、各種イベント、商店街が出店する朝市などです。空かしていてもしょうがないので、そういう利活用を早期に始め、その中で市民からも意見が出てくるだろうということで、取組みを始めています。

旧米倉分校は、以前にも説明しましたが、旧幼稚園の分園と校舎部分が1つの棟にはなっていますが、中で分かれています。市の検討では福祉ゾーンの位置づけをしていますので、親子が交流できる「つどいの広場」として一部利活用をしています。校舎の3教室分と小さい講堂は全く利用されていない状況です。

[議長]

旧米倉分校も、他の校舎と同じように鉄筋の建物ですか。

[事務局]

鉄筋で平屋の建物です。教室は、幼稚園で1室、校舎部分で3室、それに講堂という構成になります。今、利活用が決まっていないというのは、校舎部分です。

[議長]

飯高小学校を何ヶ月か前に見ましたけど、もしあの校舎が木造だったら利用の価値がいっぱいありそうですけどね。市町村の庁舎とか学校とか何でみんな同じ形でつくるのでしょうか。

[B委員]

補助金の基準があるようです。地盤改良した木造建築なら補助金率を上げるとか、一時期それで木造校舎が増えましたけど、それでも集成材が多いとかいろいろな問題があるみたいです。

[事務局]

若干特徴があるのはランチルームとあって、普通の給食は各教室で食べますが、飯高・吉田のような小規模校は、1～6年生全員が1つのフロアで食事ができるようなスペースづくりをしています。ただし、今議長が言われたように、3階建

での画一的な校舎なので、逆に建物が大きすぎて利活用するには魅力がいまいちという感じがするのかもしれませんが。

[B委員]

耐震面はいかがですか。

[事務局]

耐震補強はしていないと思いますが、比較的新しい方ではあります。多古町でも同じ校舎の跡地利用の中でなかなか決まらなくて、建物を壊して更地にしてしまった事例があります。更地にすると、民間にとっても行政にとっても二次利用がしやすいのですが、壊すにもそれなりの経費がかかりますので、簡単にはいきません。

[議長]

利用については、いろいろアンケートとかとっていますよね。

[事務局]

本日、D委員から提示されている資料にもありますが、地区で独自のアンケートは行っていますけど、市としては旧飯高小学校に絞ってのアンケートはとっていません。

[議長]

旧米倉分校についてはいかがですか。

[事務局]

地元の米倉集落では、アンケートを行いました。

[議長]

地元の意見としてはどうでしたか。

[事務局]

やはり総論的になります。「あればいい」ということになります。コミュニティの場に使いたいとか、生涯学習の場に使いたいとか、そういうふうに出てくるものです。意見は出るけども、いざ使うという段階になると、すでにコミュニティ施設があったり、生涯学習は公民館のできるのでもそちらに行ってしまうとか。ですから、あったほうがいいのかというアンケート結果が出るのですが、いざ整備した時に使いますかということになると、そういうわけでもないのです。

[議長]

まさに、自分ごとじゃないってことですよね。

[事務局]

いみじくも今日、A委員のお話どおりで、無いよりあった方がいい、どうせ空いているのだから、こういうものに市が整備して、いつでも使えるようにしておいてください、とは言われます。では毎日使いますか、というと「使わない」という議論になってしまいます。

[議長]

さてB委員、どうでしょうか。こういうものを扱うときに、ワークショップとかいろいろ手法がありますが、そういう仕掛けを考えておきましょうか。

[B委員]

自分ごとになっていいと思います。どれが一番楽しいか、自分が経営者だったら何を考えるか。少しでも進みそうで、楽しそうな気がしますね。

[議長]

市の方としては、とにかくJ T跡地が優先ですか。

[事務局]

旧米倉分校は、一部つどいの広場として利活用が始まっていますので、優先順位としては、J T跡地と旧飯高小学校ですね。

[議長]

どういう仕組みをつくっていくかということはこれから検討していきたいと思いますが、J T跡地は駅から出て商店街の入り口、こういうところで空き地があった場合、どういう活用例が多いでしょうか。

[B委員]

そこだけで考えてしまうとダメですよ。駅前とか商店街という域を出ないのでは。

[議長]

この前、私の方からサブカルチャーが生まれるようなそういう場になるっていう話をしましたけど、少し自由に意見を出してもらいましょうか。H委員どうですか。

[H委員]

自分ごとで今やっていることなのですが、昨年度、自分は障害者とか高齢者の

リハビリの仕事をしているので、その人たちが自分で何かをやりたくなるような仕組みをつくりたいと思い、小見川のOT（作業療法士）と九十九里ホームと自分の3人で企画しました。この辺の障害者が集まって、自分がやっていることをもっとアピールする場を作ってみようということで、その時は家族含めて70人くらい集まりまして、面白かったという感想をいただきました。そういうことが継続的に続くような、つまり障害者や高齢者にとってこういう生き方がありますよというモデルになってもらって、それを見て新しい発想をつくっていく「モデルバンク」というものをつくろうと、今動いています。ただ、それをどういう仕組みでやっていくかというところで、まだ悩んではいますが、自分ごととして取り組んでいます。

[議長]

最初の頃の議論で、JT跡地に駐車場をつくるという話がありましたよね。やっぱり今日のA委員の話ではありませんが、商店街の近代化というと大型店舗に対抗しようと駐車場の整備や店をちょっと綺麗にしたりと、みんなどこでもやることは同じなのですが、あれはやっぱりひとごとではないかという感じがします。

一つ、I委員の話の中で、これは誤解を受けてほしくありませんが、大型店舗ができて、商店街に全然影響がないということではないのですが、その中でも頑張る努力をしようと、自分ごとでやっているところはそれなりに生き残っていますよね。例えば、聞いてみなければ実際のところはわかりませんが、坂本さんは落花煎餅と初夢漬けぐらいじゃないですか。

[C委員]

坂本さんのお菓子を先日もらいました。そしたらビックリしまして、銀座で売っているようなお菓子でした。若い人が研究しているみたいで、とてもおいしいですよ。

[J委員]

パティシエの修行から帰ってきたとのこと。

[C委員]

パッケージもすてきで、木のようなものに包まっていてとてもすてきでした。

[議長]

何が言いたかったかというところ、たったの落花煎餅と初夢漬ですけど、それは完

全にブランドですよ。やっぱり独自性をもっているというのは、それだけで生き残ります。特に食の関係は美味ければお客は入ります。

[I 委員]

私は坂本さんの社長と友達でして、代々その店はとにかく自分の作れるものを最大限につくる。持って行っているところは三越ぐらいで、後はほとんど店舗で売っています。そういったこだわりをすごく持っていますので、たくさんのお客さんがリピーターで来てくれます。同様に鶴泉堂さんも、見てのとおりああいう風格のあるお店なので、大型店舗とは関係なく残っていますよね。

[議長]

苦しいのは家電と薬局でしょうか。家電はアフターサービスとかでやれると思いますが、薬局は難しいですかね。ヤックスとかマツキヨとかが出てくるのであれば、いろいろやり方はあるのでしょうか、そこでやっぱり工夫が必要です。そういうふうに工夫をしたところが生き残るのではないのでしょうか。単に、大型店舗が来たからといってダメだということではない、ということをお願いしたかったのです。

[K 委員]

自慢になる初夢漬の話で、私もよそのものなのですが、引っ越してきた当時、八日市場に住んだよという話をしたら、秋田の親戚がお茶をやっていて「初夢漬であるだろ」と言われて、その時は全く知らなくて「正月は必ずわざわざ八日市場から取り寄せていたんだ。知らなかったの?」と、それでシャキッとしました。自分の住んでいるまちに、すごいものがあるのだと感じました。そういうものがいっぱいできてくると、変わるのではないかと思います。

[議長]

落花煎餅と初夢漬は、やっぱり A 委員と B 委員にも食べてもらわなければいけませんね。初夢漬は時季ものですよ。

[事務局]

一年中食べられますよ。

[議長]

あと、すごいなと思ったことが、匝瑳地区の松山庭園美術館です。そこに入ったときに、お茶と初夢漬が出てきました。周りは山に囲まれて、まったくのプラ

イベートな美術館ですよね。自分ごとでアイデアを出していけば、匝瑳市もまだ捨てたものじゃないと思います。

[事務局]

松山庭園美術館は、今まで匝瑳市になかったコンセプトです。美術館自体がありませんでしたから。

[K委員]

文化的施設としては、初めてですよね。

[C委員]

匝瑳市に無いのは映画館です。

[K委員]

つぶれてしまいました。

[議長]

子どものころはありました。2軒ありましたでしょうか。

[F委員]

3軒ありました。

[議長]

L委員いかがですか。何かいいアイデアありませんか。

[L委員]

前回ちょっと都合が悪くて来られなくて、担当課の方に意見は言わせてもらいました。いろいろ意見を出してもらうのはいいと思いますが、人から聞いた話の中で、何が欲しいか聞いてみると、「銀行は何とかならない？」ということは何度も言われます。私もそうですけど、線路を越えて国道をまたいで旧道に入ります。旧道は狭いわりに交通量は多いですよね。車が進まないし、銀行に入れば駐車場が狭い、入れない・出れない、非常に便が悪い。私事ですけど、私は横芝の銀行に行ってしまう。何とかならないかということは、けっこう野栄地区の方から聞きます。そこで、どうせ市にはお金がないのだから、銀行を誘致あるいは銀行へ売却するというのもいいのではないのでしょうか。当時いろいろな経緯があって出来なかったみたいですが、千葉銀行も元々国道に出ようと思っていたわけですし、検討してみるのもいいのではないのでしょうか。

[議長]

匝瑳市もけっこう銀行ありますよね。

[C委員]

みんな入りづらいです。

[議長]

駐車場は奥にありますよね。なぜかというと、旧商店街で昔の商人の家というのは、間口が狭くて奥が長いのです。どうしてもああいう造りになってしまうのです。

[L委員]

J T跡地ぐらいの面積があれば2社ぐらい入りますよね。元信用金庫の支店長だった人に聞いた話では、銀行は1軒ずつあるより、2軒ぐらい並んでいる方が案外相乗効果があるということをしていました。財政面とかを考えると、そちらの方が楽できるとか、いろいろ考えてしまいますけどね。

[G委員]

銀行は、成田でさえ市中銀行が三井住友しかありません。あとは地方銀行だけです。それはペイできないからです。

[議長]

佐原に三菱の有名な建物がありますよね。市の指定金融機関は千葉銀行ですか。

[事務局]

千葉銀行です。

[議長]

いろいろ話が出てきましたけど、医療についても本人が治す気がなかったらどうしようもないと思いますが、M委員いかがですか。

[M委員]

今日のA委員のお話をぜひ、市民病院の職員に聞かせてあげたいと思いました。前にもお話しましたが、以前は病院の職員も自分ごとで考えている人が多かったのです。知り合いなどに聞くと、中には一生懸命頑張りたいと思っている職員がいることも少なくはないのです。ドクターがまず第一だとは思いますが、自分ごととしてどのくらい考えてくれるかということで、かなり違ってくるのではないのでしょうか。その辺がクリアできると、例えば経営形態を変えなくても、何とかかなりそんな感じがしなくもない気がします。とにかく、腰掛け的で、楽をしてお

金だけいただいてというドクターがいる限り、本当にうまくいくのかなと思います。現実にそういうドクターが、いるとかいないとかという話も聞きますので。

[議長]

普通に勤務したとき、病院勤務の医師というのはかなり過酷なのでしょうか。

[M委員]

私がいたころは、朝8時ごろまでには病院に来て、手術がありますので大体帰るのが午後10時過ぎぐらいです。当直が大体週1であり、その日はほとんど寝られなくて、その次の日はまた10時ぐらいまで仕事をして、続けて36時間勤務というのもありました。ただ、私たちはそういうリズムでやってきましたので、それ自体が苦痛だという感じは自分としてはあまりありませんでしたし、それがドクターとして当たり前のことぐらいに感じていました。上司がそのくらいの時間にいますと、出張で来たり、就職で来た若いドクターも、だんだんそういうのが当たり前になっていきます。昔のドクターと今のドクターでは、その辺が自分中心的な考え方になってきているかなという感じがします。それこそ、自分ごとで思ってくださいれば、そう難しいことではないと思います。

[議長]

市民病院の医師の研修制度はちゃんとしているのですか。経営が苦しくなってくると削られやすい項目だとは思いますが。

[M委員]

臨床研修病院というのはだんだん条件が厳しくなってくるので、旭中央病院のような大きい基幹病院でなければ、なかなかとれません。かろうじて、市民病院で今とっているのは、在宅医療分野の研修ということで、大学とタイアップして来てくれるというものがありますが、それ以上のことはちょっと無理だろうと思います。

[議長]

今日は最初から最後までA委員のひとごとから自分ごとへ、これが全てに共通していましたので、皆さん肝に銘じておいてください。あと、いくつか皆さんに聞いておきたいことがあります。A委員とB委員から少し話を伺っていますが、実際にこれらの建物を見てみたいのです。地元の方もあらためて一緒に見たときに、違った見方ができるかもしれない、という発想で一度見ておきたいと思いま

す。ただし、皆さん仕事を持っていますので、事務局の方で何か案はありますか。

[事務局]

効率的にとということであれば、早く集まっていたいただいて現地を見てから会議ということになります。ただし、夜は見ることができません。

[議長]

皆さんの状況を考えながら、事務局の方で案を作ってもらっていいですか。

[事務局]

わかりました。

[議長]

議事の「その他」にうつりますが、何かありますでしょうか。

[事務局]

本日、D委員から資料の提供がありまして、飯高地区福祉フォーラムの関係などカラー刷りのものもありますので、D委員から説明をお願いできますか。

[D委員]

飯高地区福祉フォーラムと書いてある資料の内容は、飯高小学校をどうするかということに対し、視察に行ったり検討会を行っている、というものです。あとは、個人的にやられているもので「ガーデン・オープン」という、来た人から500円ずついただいて庭を見せるというイベントがあります。チラシの中で、大きなシイの木と一緒に写っている平山さんを中心に実施されています。もう1枚の「地域まるごと体験博物館」というのは、元々日本ナショナルトラストというところが飯高を調査しまして、それを元に個人的に作り上げたものです。飯高は8ブロックありまして、その中で神社とお寺が29存在している内の、主要な部分を紹介しています。今、このガーデン・オープンを少し拡大し、旧飯高小学校を中心に展開できないかと考えています。

[B委員]

ガーデン・オープンは、私もイギリスにいたときに良く行きましたけど、個人のご家庭に入っていけるすごくいいチャンスで、お庭造りのいいきっかけになるのではないのでしょうか。

[D委員]

飯高檀林では檀林饅頭というのがあって、それを実際に提供しています。

[C委員]

大シイの木にフクちゃん（フクロウのこと）はまだいるのですか？

[D委員]

フクちゃんはなかなか見られません。この辺にいるのだろうという気配は感じます。夏場にたまたま電柱にとまっていることはありますが、木の中を追いかけるのは難しいですね。

[議長]

時間がない中で1つお聞きしたいのですが、資料の中に「黄門桜」というのがありますが、これは本当に来たのですか？

[D委員]

来たと思ってください。九十九里、三里塚からずっと来て水戸に行く道中に、黄門様のお手植えの木というのがあり、それにはいろんな種類があります。過去に大きな松が枯れてしまったということがありました。飯高には黄門桜という桜があり、妙福寺には梅がありました。梅は枯れてしまいましたでしょうか。

[事務局]

枯れてしまったかもしれません。

[F委員]

元の梅ではないかもしれませんが、ありますよ。

[議長]

水戸光圀が全国を漫遊するというお話は嘘で、一番遠くても鎌倉ぐらいだと思います。でも、匝瑳市は可能性ががありますよね。

[E委員]

幕府の直轄地ですからね。長谷や吉崎も、幕府の直轄地でした。野手もそうだという話を聞いています。

[F委員]

檀林には「お万の方」が植えたという楓があります。

[事務局]

池田堤を作ったという話がありますので、来ている確率が高いと思います。

[F委員]

一番有名なことは、檀林はお坊さんの教育の場で、立正大学の発祥の地という

ことですね。講堂も建て替えて立派になっています。

[D委員]

この大きなシイの木の後ろ側に、里山として非常に良い景観があって、4月23日と24日で、NHKのBSプレミアムの番組が来るそうです。里山と人の関わり、自然と小動物というテーマで10日に説明を受けました。千葉県で2つ選ばれ、1つは鴨川の大山千枚田、もう1つは何と飯高が選ばれたということがすごい話だなと思っています。

[C委員]

市で広報していただけますか。

[事務局]

許可の関係もあるのでNHK側と調整しないと、大々的なPRは難しいと思います。

[議長]

ミニコミ誌みたいに、すぐパッと情報が伝わるようなものはないのですか。

[C委員]

私がしゃべって広めます。

[D委員]

おそらく撮影現場には入れないでしょう。

[事務局]

そういうケースが多いですね。

[C委員]

テレビは見ることができますよね。

[事務局]

市のホームページや防災行政無線を使って、「放映される」というお知らせをすることは十分可能だと思います。

[D委員]

放送予定は、平成24年3月頃という話です。

[C委員]

ずいぶん先の話ですね。

[議長]

時間も迫っていますので、そろそろよろしいでしょうか。本日は、A委員ありがありがとうございました。次回の日程を確認します。

[事務局]

資料にも記載しておりますが、5月19日（木）をご提示させていただいております。当初は、今回と同じように午後7時からという予定でしたが、先ほど議長からお話がありましたように、現地を見るということであれば、この時間より前に集まっただいて、現地を見てから会議という流れが一番効率的かと思えます。電車の時間で考えますと、八日市場駅着の下り電車が午後2時58分の特急、その次が午後3時03分の普通列車がありますので、東京方面から来られる委員の皆さんは、その時間で来ていただくことになると思います。そうすると、午後3時過ぎくらいから現地を見て、その後会議を行うという時間設定で考えていますが、皆さんのご都合はいかがですか。

[B委員]

私は大学院の入試と絡んでいまして、会議の時間帯は参加できるので、空いているときにコースだけ教えてもらえればかまいません。

[議長]

A委員はいかがですか。

[A委員]

私は大丈夫です。

[事務局]

B委員については、別日程でご案内することも可能です。

[議長]

都市空間は鎌田委員の専門ですので、ぜひ見ていただきたいです。事務局の方で何かありますか。

[事務局]

今の時間設定で皆さん大丈夫でしょうか。

[議長]

とりあえず今の案で作ってもらって、もし欠席者が多いようでしたら、再考するというごをお願いします。

[事務局]

わかりました。

[K委員]

移動は、市のマイクロバスを使ってみんなで見に行くようなかたちですか。

[事務局]

そうですね。

[事務局]

もしバスが空いていなければ、ワゴン車数台で移動するようにします。いずれにしても移動手段については市で用意します。

[議長]

見る場所は3つですよ。3つ見たら時間いっぱいでしょうか。この他に、できれば市の特徴的なところも見てみたいのですが。

[事務局]

開会時間も含めて検討させていただきます。

[事務局]

会議録の確認は、順番で橋場委員と大塚委員の2人でよろしいですか。

[委員]

はい。

[議長]

それでは2人に確認をお願いします。本日はこれで会議終了となります。

[事務局]

ありがとうございました。

6 閉 会